

「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」検討・準備グループ(第8回)
新テスト実施企画委員会(第5回)
議事概要

日時：平成 29 年 2 月 21 日（火） 10：00～12：00

場所：文部科学省 3F 2 特別会議室

出席委員：岡本主査、沖委員、川上委員、関根委員、東島委員、宮本委員、
安井委員、乾委員、島田委員、田中委員、林委員、前川委員、
吉田研作英語四技能実施企画部会長、西村教授（清水委員代理）

【資料説明】

- 吉田部会長より英語の資格・検定試験の活用について説明
- 橋田室長より資料 1～2、参考資料 1～2、机上配布資料 1～4 に基づき英語の資格・検定試験の活用に係る対応案について説明
- 林委員より資料 3 に基づきセンター試験と個別試験の英語試験結果を段階別表示した際の相関関係について説明

【自由討議】 1、英語の資格・検定試験活用について

岡本主査：おそらく、大学ではセンター試験は段階別表示、個別の試験は素点を使用することになると思う。また、別の大学についてもデータを調べてほしい。私学も同じ結果か。

一つ確認したい。平成 36 年度の学習指導要領改訂により、4 技能の資格・検定試験を利用する。それに向けた段階的なものとして平成 32 年度からどこまでやるのかということを考えないといけないという認識である。

沖 委 員：本学でもこの調査をしてみたいが、できるかどうかは分からない。

岡本主査：どういう受験者層かということになるだろうが、国公立大は個別試験で英語を課すと思うので、傾向としては国公立・私立で変わらないのではないか。

川上委員：対外的には公表していないが、首都大学東京でもセンター試験と個別試験の相関関係の検証を行っており、林先生の検証と同じような結

果が出ている。

岡本主査：いろいろな不安があるので、データとして示さないといけない。後は、大学の入試なので個別の大学で判断する。

林 委 員：センターから提供されるデータのみ段階別表示とするとき、総合点をどのように扱えば良いのかということはこの調査のときに悩んだ。センター試験と個別試験で重みをどう変えるのか。その点も議論しないと大学としては難しい。

乾 委 員：段階別表示で示す意味は何か。段階別表示の前提は素点も出て、段階別表示も出るという想定か。

橋田室長：素点は想定していない。CEFRのバンドを通して資格試験は比較が可能になるが、点数間の比較はできない。また、点数表示だと受験生は何回も受けてしまうので回数制限も設けたい。

乾 委 員：TOEICとかTOEFLの換算表があると思うが、段階別だと試験間の比較ができ、素点だと比較できないというのは意味が分からない。

吉田部会長：各資格・検定試験は違った尺度で構成されているので、同じ満点でも扱いが異なる。そのため、1点の相関を取ることは難しい。CEFRでは、CAN-DOリストを基に何ができるかをチェックして、段階に落とし込んでいるため、これを基に試験間の比較はある程度可能となる。CEFR-Jは、科研費で8年かけて作った指標として形としては整っているが、客観性を十分検証できていないため、認定試験のデータをもとに、改めて検証する必要がある。

乾 委 員：スピーキングテストを受検者全員が受けることができるだけのキャパシティが資格・検定試験にあるのか。

橋田室長：現行のセンター試験は700会場なのに対し、資料の24ページにある通り、英検やGTECはかなりの会場数が確保できている。今回の認定に当たっては、いずれかの団体において、センターが実施しているのと同等の場所を確保できるようにする。高校や大学への協力要請は必要だが、キャパシティの確保も可能。

乾 委 員：受検者が集中してしまう時期があると思うので、キャパシティの問題は詰めないといけない。特にライティングとスピーキングは難しいと思う。

宮本委員：学習指導要領と整合性、表示の仕方、整理をしっかりとやってほしい。今のすべての資格・検定試験が学習指導要領にあっているとは思わない。基準を定めて、厳格にすすめてほしい。本当に実施できるのかということには課題がある。本校でも2学年で4技能評価テストを行っているが大変。日本でやっている高校が少ないからできている

が、50 万人が受検するのであれば、準備しないと難しい。学校と一般会場では条件も違うと思うので、環境整備には時間がかかると思う。試験として、適した条件で実施が可能になるのかというのが非常に難しい。日程面でも、学校として実施できる時期は重なると思う。希望する時期にできるかが心配。費用面はもちろん、本当に実施できるのかという意味ではハードルが高い。

関根委員：1 点刻みからの脱却をしてほしい。真の学力をつけるという意味で、段階別の評価はしていかなければならないと思う。子どもにどういう力をつけさせたら良いのかということで、点数が高ければ良いということではないというのが今回の改革のキモだと思う。

岡本主査：段階別表示については、いろんな考え方があると思う。林先生に調査をお願いした理由は、実際には個別に面接などで評価している中で、どうしても 1 点刻みでないと選抜できないものなのかということ。段階別表示を換算して個別試験の点数に加算すること、達成度として使用することなどいろいろ方法はある。林先生が仰っていた受験者層が変わるというのは、別の話になるので、相当にシミュレーションをしておかないと大学の負担になる。資格・検定試験で A 評価だと東大を皆が受けられるとなったら混乱する。平成 36 年度から学習指導要領改訂で実施するとなったとき、平成 32 年度の移行をどこまでできるか。個人的には、調査・研究をやっていって、だんだん進めるということだと思うが、平成 32 年度が失敗して、平成 36 年度がつぶれるというのは良くないと思っている。場所と経済的な格差については別の問題としていろいろな問題を解決しないといけない。

山本理事長：机上資料 3 について、センター試験と C E F R のバンドの記載があるが、A 2 レベル以上を必履修としている。資格・検定試験を受検する生徒は比較的英語のできる人。それでも、センター試験で 150 点以上取っているのは上位 20% の人間。そうすると、150 点以下の者について、どういった試験をやっているのか、識別力のある問題ができるのか。その点についてはいかがか。ボリュームゾーンにどう学力をつけさせるかが入試改革のスタート。ボリュームゾーンをどう識別していくのか。上位層についての議論になっている。

吉田部会長：英語検定試験は今のところ、一次試験に合格しないとスピーキングの受検はない。ライティング・スピーキングはこれから全レベルで入れていく方向ですすすめている。テストは幅があり、ボリュームゾーンは A 2 ～ B 1 だが、その前後のレベルも測れるようになっている。なので、B 2 のレベルについても日本のテストでは測れるようになっている。

る。TOEFLなどは海外の大学で勉強することを想定しているため、そのレベル以下の識別が難しくなっている。高校生で準2級を持つ人は増えている。学習指導要領が改訂されるので、平成36年度には今より伸びていると期待している。

山本理事長：吉田先生から下のレベルも識別力があるということ、高校生のレベルも上がっていくことおっしゃっていただいたが、現在ではセンター試験の英語で150点とれるのが全体の20%くらい。このレベルがターゲットで議論されていると思うので、その他のレベルも意識して議論してほしい。

川上委員：入試制度を設計する方では、いろんなルールがあって、教科・科目も公表しないといけないので、実際に試験を実施するのは先のことだが、2年程度前に公表しないといけないので、それまでに方向性を示していただかないと実際の試験科目に入れることが難しくなる。学習指導要領変更後は全生徒受験することになるという認識で良いか。それも見据えて、試験教科科目を考えていかなければいけない。何がいつまでにどう決定するか公表してもらわないと現場としては困る。情報を示してほしい。早くしないと、現場での議論ができない。

橋田室長：平成29年度初頭には方針を示す。それを踏まえ、どういう団体を認定するかを決めていく。2年程度前予告との関係も考えて再度整理したい。

田中委員：資格・検定試験を選抜試験に使用するということなのか、資格・検定試験の調書を利用するということなのか。学習指導要領でA2相当の科目を必修科目にするということであれば、高校卒業時点でA2のレベルということが前提となる。となると、センターに登録をする際に、A1レベルの生徒は門前払いとなりうる。高校はA2に達していない生徒を卒業させることはできるのか。A2が卒業要件とすると大学への出願もA2以上でないとできないということになるのではないか。

岡本主査：若干議論が混乱している。高校の達成目標がA2ということが、卒業要件、出願資格と同じではないと思う。入試となると、1点刻みか段階別表示かという話になると思うが、今は共通テストの話なので話題を絞る必要がある。

齋藤教育官：CEFRが学習指導要領でどういう位置づけかということについては、現在検討中ではっきりしたことは申し上げられないが、小学校から高校にかけて一貫して英語力を高める指導上の目標としてCEFRを使用するという。卒業要件にすることは制度上できないと思

う。

【資料説明】

○伯井理事、澤田課長より資料 4、机上配布資料 5 に基づきモニター調査結果（中間まとめ）について説明

【自由討議】 2、モニター調査結果（中間まとめ）について

林 委 員：島田先生にお聞きしたいが、採点のしやすい国語の問題と多様性のある国語の問題がある。国語教員としては、どちらが好ましく、どちらを採用すべきか。

島田委員：今回は条件付きの作文を記述式の問題として出している。条件が厳しくなるほど採点は簡単で、自由度が高くなるほど採点が難しくなる。バランスの問題で、識別力との兼ね合いもあり、どのくらいにするか考える必要がある。「契約書」という問題の素材文は、解釈が常に一義になるという点で、解答し易かったという一面はあるかもしれない。しかし、素材文が一義的に解釈できる文章なら良い問題になるというわけではない。記述式問題の素材文は、解釈が常に一義になる論理的な文章でなければならないということはないと思う。

乾 委 員：マークだと 80～90%正答していたものが記述式では 50%という話が面白かった。今回のモニター生 400 人の対象者はどういう方だったのか。

立脇先生：都内を中心とした大学 1 年生で、現役で国語・数学でセンター試験を受けた人。国語・数学のセンター試験での得点が平均の 10 点～20 点高い学生。学力を考慮して均等になるように、2つのグループに分けて調査を行った。

乾 委 員：全体に正答の低さが目立つがボリュームゾーンを対象にすることが大切。プレテスト 5 万人の作題はこれからだと思うが、難易度調整を十分に考えてほしい。正答率は○×で出しているのか。

立脇先生：現在はそうにしている。今後は△も入れることを検討している。

乾 委 員：せっかくなので、なるべく有効なデータがでるものにしてほしい。フィージビリティを検証するものなので、難しい問題や採点が難しい問題をあえて使うのではなく、保守的に問題を設定し、着実な結果を得

てほしい。

岡本主査：もっと記述式の差はでてくると思う。今回は問題の方で工夫したのではないかと思う。

【資料説明】

○橋田室長より資料 5 に基づき新テストの実施方針に盛り込むべき主な事項等について説明

【自由討議】 3、新テストの実施方針に盛り込むべき主な事項等について

乾 委 員：パターン 1、2 は両方ともやるという理解をしていたが、どちらかになるのか。

橋田室長：パターン 2 は国公立において共通テストで提供できると考えている。パターン 1 は同一日程でやるには時間をとらなくてはいけない。受験生によって、受検する人、しない人がいるので私立大学として利用は難しい。パターン 1 は、スキームにのる大学がどれだけあるか。日時を合わせる必要があるので、団体の意向も聞きつつ詳細を詰めていきたい。

乾 委 員：パターン 2 か 1 かといったように資料が見えた。書き方を工夫してほしい。

岡本主査：平成 29 年度には発表しないといけない。平成 32 年度でどうするかだが、平成 36 年度はどうなるのかという方向を見せた上でないと難しいと思う。

山本理事長：テストの性格はどういうものか入れないといけない。センターが引き続きやるかも含めて、今は大学が共同してやっていくという性格だが、そのあたりがどうなるのか、テストの基本的な性格も書く必要があると考えている。

前川委員：得点の有効期間はどうか。それも考えてほしい。

以 上